

<源氏物語ノート>

～ はじめに（読書の動機と方法）～

紫式部の『源氏物語』は日本文学の古典中の古典ということで、「いずれの御時にか…」で始まる冒頭の一説は確か中学か高校で習ったような気がする。その時の印象では、先ず古語が分からないし、内容を説明されても少女マンガに似た雰囲気を感じて全く受け付けなかったと記憶している。だから今まで一度も正面から読んでみようとは思わなかった。

でも年のせいだろうか、専門的な研究で様々な問題点が指摘されて居ながらも『源氏物語』は紛れも無く古典中の古典なることは揺るぎないし、そこに残された優雅な日本語を味わってみたいと思うようになった。そこで原文掲載のWebサイトを探すと、物凄いサイトがあった。原文や現代語訳が掲載されているWebページ(渋谷栄一高千穂大学教授の「源氏物語の世界」<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/>)が其れで、紛れも無く機を得た金字塔だろう。で早速、少し眺めてみたが、改めて古文はやはり面倒だし、話にはどうもメロドラマの趣を禁じ得ずして、以前の印象を追認してしまった。ただ、それでも幾らかでも何某かを味わってみたいという気持ちは消えなかった。

というわけで、なるべく簡単に『源氏物語』の言葉の雰囲気を把かむ読み方を少し考えてみた。幸いに『源氏物語』は古典だが、漢文ではなく平仮名口語体なので、表記通りの音読で語感が感じ取れそうにも思えたが、名詞や動詞の区切りが分からないので、実際には読み進めない。で、考え付いたのが、現代口語訳で意味を安直に概括しながら、自分勝手に平仮名文に漢字をフツて、単語や文節を分かりやすくする方法だった。逆ルビのような感じだろうか。振り漢字は(漢字)表記で、振り仮名は(ひらがな)表記といった具合になる。と理屈っぽく云っても、これがごく普通の勉強方法なんだろうし、先々どうなるか分からないが、とりあえずこの方法で『源氏物語』を読んで行こうと思っている。

下敷き原文は、「源氏物語の世界」<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/>サイトから、ダウンロード・フリーということで、有り難くコピーした。

参照文献・サイトは読み進むうちに多数になると思うが、今の時点での整理列举が適わず、文中付記にて容赦を乞う。(2008年12月15日)

～ つぎに（読書前準備としての概要把握）～

原文を読む前に、この物語の概観を見ておこう。なにしろ千年以上前の王朝物語なのだから、作者や舞台背景について少しは知っておかないと、単語が分かってても文の意味が分からない破目に陥る。Wikipedia 他のWebサイトを参照して、いくつかの要点を調べた。

1. 出典

自筆稿はおろか平安期の写本も残っておらず、平安末期の「源氏物語絵巻」の一部が現在に伝わる最古の「源氏物語」を表現した関連資料とされている。写本としては一般的に、鎌倉時代の初期の写本で、藤原定家の「青表紙本」と源光行・親行のまとめた「河内本」とを原

典とするようだ。また今回の試読で下敷きにさせてもらった「原文」は、これらの原典のいくつかの再写本を基に渋谷栄一氏が校訂された Web 公開文ということらしい。

その他複数の資料によって「源氏物語」は、ほぼ間違いなく平安時代中期に成立した長編宮廷小説とされている。「されている」表記は、多くの研究者によってほぼ定説と見られる学説などに拠る、という意味。）

2. 平安時代

平安時代は、794年に桓武天皇が山背葛野(やましろかどの)に宮処を遷してから、1192年に源頼朝が鎌倉に幕府を開くまでの年月とされている。ということは、奈良平城宮の朝廷直轄官僚制による中央集権から土地開拓武家の自立による地方分権へとクニの形が変容し続けた時代だったのだろう。その変容は、農業生産力の向上による国力の拡大なので、現代のような目まぐるしさではないにしても、宮廷内は基本的には成長路線で変化し続けた。そのエネルギー総体が、王朝文化を醸成したのかもしれない。

3. 王朝国家

島国日本において、1853年のペリーの黒船以前に島民挙げて国家統一を強烈に意識したのが、663年の白村江(はくそんこう)の戦いだったらしい。朝鮮半島の錦江(きんこう)で倭の水軍は唐の水軍に大敗して、迫り来る唐の倭国直侵を恐れたという。この非常事態に際して、中大兄皇子(なかのおおえのおうじ)は先進国たる唐の統治体制に倣って、統一君主=天皇を中心として島内諸勢力の一致団結を図る強力な中央集権体制を画策した。

これが各地豪族の自主自立を押さえて、天皇を頂点とする官僚制で統一国家を統治するという、律令国家の始まりとされる。唐の攻撃は直接には朝鮮半島の百済と高句麗を滅ぼし、時には同盟した新羅にまで迫った。その結果、朝鮮半島を追われた先進文化人が大挙日本に渡来して、律令体制の構築に貢献したらしい。そして、中大兄皇子=天智天皇(てんじてんのう)の没後その5代目になる文武(もんむ)天皇期701年の大宝律令制定で日本国というクニの形が広く認識され、6代目になる元明(げんめい)天皇期710年の平城京遷都でその実現が企画された。

しかし時代はその後、国内外で軍事覇権より警察治世へと推移し、統治体制は実質で、律令制から王朝制へと変わっていった。ただし制度としての律令制は、皮肉な事に、1867年の王政復古の大号令で天皇中心の新政府樹立が企画され、翌1868年に政体書で太政官制を実質復古しようとした時から初めて真剣に見直されて、1871年の廃藩置県の断行で実権の整備を図った後に、いよいよ列強の帝国主義に抗すべく軍事立国を目指して1885年に内閣制の国体となるまで続いた、というより放置された。

ともあれ平安期においては律令制は形骸化し、国勢が天皇の直轄で治め切れないほどに拡大して、クニは統治機構としては官位の権威保持に努めつつも、実質の管理は現場の司に任せるようになっていったことを意味する。朝廷は行政府から権威付けの王宮へと変容した。国力が増す中で権威が上がるのだから、宮中はこの世の春を謳歌するばかりという面はあっただろう。それが文化を高めるし、同時に浪費も促進する。その反面、実際に経済力を蓄積する実力者は朝廷の外で地盤を固めていく。朝廷は態良く二階へ担ぎ上げられて、いつか梯子を外される危険をはらんだ。

こうした底流のダイナミズムも電気通信はおろか、内燃機関による大量生産すら思いもよらない文字通りの手作繰り時代にあつては、叙位が天皇の専権でありさえすれば、官僚の身分秩序たる官位令を内から変える必要は無かつたらしい。実際、明治維新まで律令法は廃止されなかつたし、叙勲は今猶続いている。ともあれ、平安時代の王朝国家にあつても、奈良時代に制定された官位令に基づいて宮廷生活が営まれていたことは確かなので、その身分秩序を知らないとは後宮事情も分からない。事実、「源氏物語」は女衆が語り聞かせる文体で、語り手の尊敬語や謙譲語による表現で、聞き手が自ら主語が分かるような記述がなされているので、身分秩序を概観しておくことは必須となる。

4. 身分秩序

大宝律令の定めた統治機構は、二官八省(太政官・神祇官の二官、中務省・式部省・治部省・民部省・大蔵省・刑部省・宮内省・兵部省の八省)の官僚機構とされる。八省は政務機関なので、身分秩序とは別概念となる。二官の内、神祇官(じんぎかん)は祭祀を司る行司神官なので、形式上敬われる程度の地位は与えられるが、実権者に任命される立場にすぎないので、自ら地位を争う官職ではない。尤も今に至る天皇制の拠り所こそは、この神祇官としての天皇の存在に其の本質を見る気はする。ただし天皇制の超絶性は、絶対権力者が自らの地位を律や令などの制度で規定しない、という耐内圧性の高さに担保されていて、島国の事情に拠るとは言えるのだろう。

さて、で実際に地位を争うのは、実権者たる太政官(だいじょうかん)に規定された面々である。官職上の権限では、太政大臣・左大臣・右大臣が長官職で、大納言・参議が次官職で、少納言・弁官が局長職とされる。ただし、実力者はこの職権を直接争うのではない。身分ある者が其れに相応しい職責に就くという形式なので、実力者は個人の身分(給与水準)たる位階の獲得に執心することとなる。誰が位階を授与するのかといえば、それは勿論、天皇である。天皇が位階を授与することで、管理職候補者個人の社会的身分が規定される。この天皇による個人の絶対支配で、全ての権威と権力を天皇に集中し、天皇を頂点とした国家体制の確立を企画したのが、律令制ということになる。

ところで今、「個人」という言葉を当たり前のように使ったが、之は物性上で自律管理する、またはそう見做される生命体の単位である。単位という事は「概念」である。ただ「概念」といっても実体を伴う人間社会の基本的な概念であり、之に基き諸制度は定められている。しかし生命体の連続性を考えれば、人間は決して「個人」としては存在していない。生産性の効率化を図って便宜上、律令制は地位の世襲を認めない「個人」体系を制度化した。之は凡その社会制度に共通する特性だろう。しかし世襲制を除いても、人間の世襲性は失くならない。人類が受精・懐胎・出産によって種の継続を図る仕組みは、今日でも尊いものとして受け継がれているし、社会の安定と福利は施政者の大命題である。

この特性は財産権や其の相続、また育児・教育・看護における家庭の役割として、社会制度化が図られている。ただ、個人の生産性を競わせれば良い地位体系に比べると、世襲性の制度化は多くの要素が複雑に絡むので合意形成が難しい。また、生産に対する消費でもあるので是等の制度については、設定だけでなく運用も政府管掌の日常業務となる。今日でも変わりはない。そこで、この困難な問題を調整する知恵が皇位の世襲制と、皇帝に

依る男子への位階授与の専権であった。女は家の財産権はあったが地位は家の男に服した。耐内圧性の高いこの不文律は、島国日本においては殊に耐久性が良かったのである。

したがって律令制の位階で見ると、首席職は従二位(じゅにい)以上、次席職は正三位(しょうさんみ)、次々席職は従四位(じゅしい)以下とされたが、この身分秩序が、後宮においても適用されたというわけだ。首席家の娘が宮入りすると女御(にょうご)という高位妃の地位となり、次席家以下の娘が入内すると更衣(こうい)という低位妃の地位となった。ただ低位とは云っても、天皇の夫人として後宮に入内する事自体が、文字通り雲上人となることなので、初めから庶民の暮らしとは別世界の事情ではある。それでも、その世界に暮らす人たちにとっては現実の事情で、其処での地位は命懸けの切実な事柄となる。

後宮は帝の妃たちの住居で、帝や妃たちに仕える多くの女官下女が暮らす、それ自体が権力の実体として讃えられる憧れの舞台である。と同時に、権力者たちが帝の夜伽相手として自分の娘を送り込んで、多くの女性が帝のお渡しだけを待って暮らすという伏魔殿でもある。千代田城の大奥に似る。権力者は、自分の娘が世継ぎを儲ければ、その後見者として揺るぎ無い権勢を誇るという仕組みである。これは先ず、組織を情に依らず理で律すべく帝の男性たる超絶性が国体護持に求められたので、帝は理性たるべく性愛と様式美の権威だけを与えられて実利からは遠ざけられた。次に、其の反面に御産の穢れから超絶性には限りあると見做された母方の実家が、女性たる実情こそその経済力を以って、育児を担うと同時に祭事を執り仕切る習しと為っていた、ということに由来するのだろう。

組織を理性で律する人間社会だけが、つまりは人類だけが、斯くも大きく複雑な集団を形成し、如何に其の福音を享受しているかは、古今東西の史実が、また今日の現実が証明している。ただ、性愛を理性とし、経済を情念とするのは、片や想念であり、片や摂食だ、という観念上の区別であって、実質で切り離せるものではない。正反対に観念することも容易で、巫女は女と相場が決まっている。しかし、それでも理性で斯くの如く見做せば、其の基準で組織を構築するのが人間社会だ、というところだろうか。

この仕掛け多い舞台を眺めれば、物語の主人公、源氏の君(げんじのきみ)が桐壺帝(きりつぼのみかど)と桐壺更衣(きりつぼのこうい)との子だった、という作者の設定が、当時の人々にとって如何に波乱含みを感じさせる書き出しだったかが偲ばれる。

5. 作者

いくら作り話とはいえ、帝について、まして後宮での秘め事を書くことは相当な権力者の後ろ盾なしには不可能である。と同時に、自ら宮仕えして宮廷内の噂話に直接接触しなければ話の中身が作れない。ということは、作者は時の実力者に手厚く庇護された女官ということが推察される。その通りだった。

作者の紫式部(むらさきしきぶ)は、推定 970 年代生まれで 1010 年代没の 40 歳くらいの生涯だったとされている。家父は一条(いちじょう)天皇期に中級官僚を務めた藤原為時(ふじわらのためとき)という人で、作者の公式に残る名は為時女(ためときのむすめ)である。また為時が藤原姓の式部省の役人だったことから、作者は宮中で藤式部(とうしきぶ)と呼ばれたらしい。ということは、作者は宮仕えしていたということになるが、其の御仕え中のことが書かれたのが「紫日記」である。

というより実は、この「紫日記」によって「源氏物語」の作者が藤式部＝紫式部であろうと推定されているらしい。「紫日記」は1010年に書き上げられた、1008年秋から1010年正月にかけての宮中生活諸事の日記で、それ自体が歴史的価値が高く、「源氏物語」の評判ぶりや同僚同輩女官歌人の人物評などもあって興味深い内容だという。

紫式部の宮仕えは1006年から六年間以上に渡り、30歳代をずっと宮廷生活で過ごしたようだが、仕える数年前に年の離れた従兄で高齢だった夫と死別しており、其の夫との間に儲けた娘が一人居たという。ところで、このような宮廷物語が語り継がれるに不可欠な権威付けとして最も重要なことは、誰(どのような権力者)に仕えたのかということに他ならない。それが何と、一条天皇の中宮(ちゅうぐう、皇后の住居＝天皇の妻)なる藤原彰子(ふじわらのしょうし)に、女房(にょうぼう、女官)として仕えたというのである。どこかキナ臭く、妙に納得がいく経緯ではある。

当時の関係者が、今日の活字文化や電子社会まで見通せたはずも無いだろうし、彼らの国際感覚及び其の時点でのクニの成り立ちや規模からも、彼らの自覚した権威構造に然程の普遍性を考えていなかったのかもしれない。しかし事實は、それが2008年現在に至るまで、天皇家の血筋と天皇制の概念が引き継がれていて、現在に生きる我々に問題提起し続けている。勿論、当時の人々が今日の状況を予知する事は有り得ないし、有り得たとしても無意味なのだが、それでも当時でさえ、宮廷事情をここまで明けて透けに伝えさせてしまうには、単に天皇に近しいだけでなく、この文芸を主張すること自体に政略性が無ければ成立し得ない事は、ほぼ物理である。

この王朝物語の明けて透けさは、その後の朝廷の権威付けが滑稽に見えるほどだし、世界大戦に至る帝国主義の狂乱を思えば、日本国民ばかりか関係した全ての人々に哀悼の念を禁じえない。現在に至るも尚、其の権威付けに躍起になっている人たちが居る悲しさは、「源氏物語」を読む意味を重たくさせるような気さえする。尤も、其の重たさは物語を読む動機付けにするには、いかにも疎過ぎる。この物語はそう簡単には読み下せない。

6. 文芸の政略性

「源氏物語」は、半分事実で半分虚構だ、とよく論評されている。小説なんてみんなそうだろうくらいに思っていたが、「源氏物語」の場合、改めて登場人物を見ると、その地位や人間関係から、話の基と類推される人物や事件に、今日でも調べられる資料が多いことに今更ながら驚愕する。千年以上前の人物で、其の関連文書が残っているとは、何という公の存在だったことか。折角だから雑観しよう。

ただ私は今の所、話の中身をほとんど知らないなので、誰がどのモデルだとか、何処が何の事柄の写しだとかには、興味の持ちようが無い。ただ、興味深いというより、事前知識として押えて置きたい人物評や人間関係が少し有る。先ずは、紫式部が仕えた中宮彰子周辺からだが、読み進めるうちに調べる人物が増えそうな気はしている。

彰子の父、藤原道長(ふじわらのみちなが)は藤氏長者(とうしちょうじゃ、藤原氏筆頭)であり、当時の藤原氏は皇室に他氏を圧倒する血縁関係を結んでいたことから、彰子の子が有力な世継ぎ候補となった。しかし、一条天皇には道長の兄、藤原道隆(みちたか)の娘、定子(ていし)が彰子の前に入内して、第一皇子を儲けていた。ただし、道隆は既に没して実権は道長に移っていた。にも関わらず、一条天皇が四つ年上の定子を寵愛し続けた。

実際には、一条天皇の後継は既に決まっていた三条天皇(道長の姉の子)が就いたが、道長は譲位を求め、五年ほどで彰子の子を後一条天皇に戴き、自らが摂政に就いて権勢を振るった。なんと当時の皇位継承は、丸ごと藤原氏一族の摂関権力争いだっただけだ。一条天皇が執心していた定子に仕える清少納言に対して、藤式部を彰子に仕えさせる事は藤原道長にとって、藤氏長者として、また彰子の親として、他勢力を牽制する意義は相当程度に大きかったに違いない。

それも、どうやら実質で権威に直結していたようだ。漢詩・管弦・和歌を嗜むのは宮廷生活に必須の素養らしいが、朝廷が行政実務を地方へ委ね出して、学識による権威付けで文化立国を図る中で、文芸での優劣が権勢を左右することは、意外と今日のテレビ社会に通じる現実にも思える。さらに少し夢想すれば、情報操作に危惧は覚えつつも、それでも情報社会が軍事世界を凌駕すると信じたい。とはいえ、客観性の先にある正当性を体現する祭礼が、単に土への回帰に基づくとも思えないので夢想も止るが、思索を超えた集団興奮を米国の大統領選に探すほどには、人間の存在が見え透いたものと考えたくはない。

確かに今日の科学技術によって実際に、生活が支えられ、世界が切り開かれ、時代が変わってゆく。しかし人間社会が、実体の性と財という個体概念を規律と様式美という集合概念によって構成している組織たることに変わりはないだろう。もし古典が味わえるとしたら、そこに其の要素が描かれていて、登場人物の息遣いを感じて、一緒の時を過ごした、と少なくとも読者が思えたということだろう。それで読者は豊かな経験を積む事が出来る、つまり人生を余計に楽しめるというわけだ。作者または多くの先人が壮大な主題を意図した事は有り得るし、それを知る事がこの物語を味わうという意味なのかも知れないが、今は楽しめれば其れで十分だろう。幸いにも、当時の平安京の概念図や大きさ、都市構造、社会構造、大内裏の配置図、内裏の配置図などの資料もあり、絵巻物も残っていて、話の内容を具体的に想像することも出来る。

ここまで「源氏物語」の概要を見て、大雑把な視点も定まったので、そろそろ読み始めていきたい。ただ、読み進めるうちに、どうやら何度も周辺資料を見直すことになりそうだ。

(2008年12月20日)